

田辺昭三君の『須恵器大成』に対する授賞審査要旨

本書は三章より成り、その第一章を「須恵器研究小史」とし、これを三項に分ち、第二章「須恵器の製作技法」を同じく三項に分けて記述を進め、第三章「須恵器生産の展開」も同じく三項より成る。その構成を見るとつぎのごとくである。

即ち第一章「須恵器研究小史」は、先ず江戸時代の茶人・文人等が、須恵器の奇古な形に着目して愛玩し、さらに須恵器の技法は僧行基からの伝播とする所伝によって行基焼と呼ばれたことを述べ、これに対応する千利休・黒川道祐・藤貞幹・木内石亭等による学術研究以前の弄古趣味的環境から脱しない関心と彼等の収集愛玩した土器資料を挙げ、次にこれらの人たちによって提唱された行基焼は明治に入って「祝部土器」と呼ばれ、やがて現在の「須恵器」への名称に至るまでの実証研究を取り揚げて、一応須恵器研究の特徴と今後の研究課題と展望を指摘している。

第二章「須恵器の製作技法」は「器形と用途」、「成形の技法」、「窯と焼成法」の三項より成り、本書の主眼となるところにして、筆者が特に努力を傾倒したことがわかる。

先ずその器形の論述において、須恵器が江戸時代以来いろいろな名称をもって呼ばれていたことに対する批判を加え、その器形の形態的特徴を考慮しながら正しい名称を求めようとしている。このことは日本考古学の現時点ではす

べて確定するわけにはゆかないが少なくとも筆者の見解は、須恵器研究においてその器形に対する正しい名称の設定について寄与するところが多く、またこれは須恵器研究の体系確立に資するものである。

器形につづけて用途を論じている。用途は器形への観察とともに当然関連する重要な課題である。筆者が器形からその用途を判定しようとしていることは当然な方法である。

しかし用途の問題は実証に依らなければならない。本書においてはこの点が弱いけれども朝鮮での実例を引用し、液体貯蔵のことにも触れており、現時点において可能かつ必要な観察を試みるとともに須恵器の用途を日常生活の貯蔵用、供膳用と葬祭供献用に分類している。この分類は基本的なものとして採用さるべきであるが、器形と用途との関連についての追究はやや不充分である。用途の実証はむずかしいとしても『延喜式』の「神祇・内膳司・造酒司・主水司」等の諸項目に拾えば、本項の補強をするものが少なくない。

第二項では「成形の技法」を観察している。これは従来研究者が多く触れることなく、研究上のブランクを埋めたものとして評価したい。特に筆者の努力を集中したことが察知され、またその論述は実証的である。この問題は須恵器の考古学的研究において重要課題でもあり、筆者はこの認識に即して、その論ずるところ精緻な技術面にも及び説くところ須恵器の実物をとりあげ、これに復原的観察を与え、須恵器個々の成形技法の細部にまで追究を加えて本書の価値を高めている。

ついで第三項に「窯と焼成法」をとりあげる。成形され、適度に乾燥した須恵器を窯に入れて焼成する。これがなければ土器の用をなさない。この項は現在に残る窯跡から観察をしなければならぬので、はじめに窯の詳しい構造

から記述に入り、時期による多少の変化はあるが、窯の構造の基本は新古の区別なく一貫しており「窖窯（あながま）」によって焼成されたことを述べる。

窯の築造法には「掘抜き式」と「半地下式」の二種類があり、何れも丘陵の斜面を利用することを指摘し、須恵器の「窖窯」のほとんどはこの半地下式であるとし、時期の区別は五世紀中頃の初現期から七世紀前半までを第一段階とし、七世紀前半以降を第二段階とする二期区分を提唱している。かくして須恵器は製作器具としての轆轤の使用と窯内の還元焰焼成によってできるとされてきたが、筆者は還元焰焼成は須恵器の製作技法としての決定的要素ではないとして、なおその条件について検討を加えている。

第三章「須恵器生産の展開」は「須恵器の変遷」、「須恵器生産の諸段階」、「地方窯の成立と展開」の三項より成り、生産の全体について視角を投げ、地域研究に注目している。即ちこの地域研究こそ、須恵器と古代人生活との連りを体系的に示すものである。その研究の為には須恵器形式推移への観察も必要であるし、これに編年の基準を求めなければならない。

筆者はこのことに関し「時間と空間」（時代と地域）の言葉を使っているが、まさにその通りである。須恵器の製作・生産の目的はすべて古代人の生活と地域から遊離しては意味を成さない。

かように本書は本文論攷とともに、多数の図版・挿図によって論旨の徹底を期しているが、同時に須恵器自身の芸術的表現を捉えようとしている。ただこの上に窯跡の分布図を添えて理解を助けたならば一層の効果を挙げえたであらう。

また筆者には須恵器を単に形式的編年の尺度にとどめるのではなく、古代史全般の問題に積極的に役立てようとする意図も認められる。

かくて本書はこれまでの須恵器に関する研究成果を総括して須恵器研究の方法と体系の確立を意図したものでして、その論放は堅実であり、学界に寄与するところが少なくない。